

無言の晚餐

著…里見弴

底本「縁談宴」改造社

大正十四年一九二五年十二月十八日発行

秋。
あき。

或る晩の食卓で、いつもなら、五勺くらゐしかはいらない、摘みのついた白磁の銚子を一本あけると、いゝ機嫌になつて、既に六十を越した人とも思はれないやうな響きと力とをもつた大聲で、盛にまくしたてる父が、まるで一言も口を利かなかつた。眼の玉も動かさなかつた。飴色に染つた古い象牙の箸で、ほんのぼつちりづゝ飯を摘みあげて、さもまつさうに口へ押し入れ、前の分、そのまた前の分とたまつて了つたのと一緒に、頬をふくらませて、いつまでもクチャクチャつてゐた。それから、飛び出した喉佛の骨をゴクリと動かして呑みくだした。副食物には、ほとんど手を附けなかつた。

差向かひに母が腰かけてゐた。吸物を一口すつたきりで、これも茶碗の飯に視線

を釘つけにしてみた。矢張りのろくと箸を唇へ持つて行つた。盆を両手に、軽く膝のところにあてゝ、扉の近くに立つてゐる女中までが、ぢつと頸垂てゐた。

また洋爐に火を燃すほどの時候ではなかつたけれど、でも大ぶんもう秋は深かつた。飯時以外に人氣のない食堂は薄ら寒く、ロコゝ式の枝様燈架に電燈の色も暗んでゐるやうに思はれた。爐臺の上で、英国製の大きな置時計が、カチン、コチンと、へんに重々しく時を刻んでゐた。

私は十六だつた。だしぬけに一家の上に落ちて來たこの不安な寂寞の意味は、はつきり胸に映つてゐた。然しその原因は解らなかつた。心持としては解つてゐたが、具體的な事実としては何も知らなかつた。——私も食ふものに味がなかつた。

ふと氣がつくと、まだその頃には人が振り返つて見るほどのハイカラで、饅で巻毛にした束髪の庇を深く、母が差しうつむいてゐた。影にはあつたが、金縁眼鏡の奥で、瞼が頻りとはばだゝいてゐるのを見た。さうしながら、時々思ひ出したやうに、飯を唇に運んでゐた。

父の眼が、チロリとそこへ射つけられた。

「茶だ」

一膳ぎりで箸を措いた父は、茶を飲んで了ふと、いつもの通り、上下の総入歯を一枚づゝ、含嗽茶碗のなかにほき出し、指先で附いてゐるものを落してからもとへ納めた。その動作が、いつもと違つて露惡的だつた。人の見る前で、故意と汚いことをしてみせる、と云つたやうな、ひねくれた氣持が露骨に現れてゐた。

母親も氣を取り直した。どうやらかうやら一膳の飯をなくなした。その間に、一度も副食物へは箸をつけなかつた。茶を注いで來る間に、香の物を一片口へ入れただけだつた。

父は、食後の果實が來るのも待たずに、席を立つた。書齋の方へ導く扉が、ド

スンと陰気な家内に籠り響いた。祈禱の時のやうに指を組合せ、膳を引いたあと
の食卓の上に、肘からさきを投げ出して、母が一つ深い溜息をつくど、そのまゝ
ちつと頸垂れて了つた。

「御前様のお食後はいかゞ致しませう」

女中が、運んで来た果實の皿の上へ、軽く面を伏せて云つた。

「召し上げるまいよ。でも、持つて行つて伺つてごらん」

母の聲音には、へんにかすれたやうな、不自然な堅さがあつたが、それでも顔は、
ちやんと女中の方へ振り向けて答へた。「わたしも要りませんから」

私ひとり、ぼんやりとネーブルの汁を吸つた。ねばつた指先をフィンガー・ボ
ールでしめして、ナフキンに拭ひ、それをしほに、この、具合の悪い、呼吸づま
りさうな空氣のそとへ出て行かうと思つた。――が、いかにしても母の姿が哀れ
だつた。無言でそこに腰かけてゐた。氣勢で感じて、チラとこつちへ投げによこ
した母の眼差は感謝に充ちてゐた。

何もかもさげて了つてから、女中が、テーブル・クロスのはしに手をかけて、

「ちよつと御免くださいませ」

「え?・・・はいよ」

やつと氣がついて、母は、そこに投げかけてゐた肉附きにいゝ腕を引いた。女中
は、雪白のテーブル・クロスを畳んで了ふと、あとへ、土耳其模様の古ぼけた卓掛
をかけ、そして一寸小腰をかゞめて出て行つた。

時計の音が耳だつて響き出した。私は、接穂なく、手の平で、卓掛の上を撫
で廻したりした。

もう一度深い溜息の聲が聞えた。今度には、(あゝ、もう仕様がな)とかな
んとか、兎に角引續いて来た考へに一段落つけてやうな、決意の響があつた。

「まア、随分ひどくなつてるね」

それで顔をあげ、母の視線をたどつて、自分の手元を見ると、いつか私は、小楊枝の先で、厚ぼつたい卓掛の、糸がほつれて、一寸ほど裂けたところを、グイッと大きく廣げるやうにしてゐた、

「えゝ…」

「うちのならいゝけれど、こんなになつてゐても、おかみのものだから…」

さう云ふと、すぐ母は立つて呼鈴を押し、女中に針と糸とを持つて來させた。

「ぢやつと膝つといつてあげようや」

そばに來たので、私は、今までかけてゐた椅子を母に與へ、自分は近くの一脚へ席を移した。——母の指に縫針のあるのが、珍しい、と云ふより不思議な氣持ちで眺められた。恐らく、それが見初めの見納めだつたらう…。

「これはね、うちでこゝに越して來た時から掛けてあつて、汚ならしいと思つたんだけど、ついそのまゝ使ひ續けて了つたんだよ」

神経がたつてゐたせいか、「了つたんだ」と云ふ言葉が、可訝しく耳へひツかつた。父が役を退いて、この官舎を出るなどの話は勿論なく、まだ將來へ引き續くべき事柄に、「了つたんだ」と云ふやうな、ものゝ終りを意味する言葉使ひが、私の耳にも、同時にまた母自身の耳にもほんの軽くであつたが、異様や響を傳へた。釋りやうによつては、それを打ち消すためのやうに、母は言葉を續けて、

「とつて、納つとゐて、こゝを出る時に忘れずにかけて行けばいゝことなんだが、もうこれはおさうよ。なんぼなんでもあんまりみつともないからね」

「それですな」

思つたより、母は元氣だつた。それから引越の話になつて、今まで移り住んだ官舎や、一時の假の借家や、父の好みで建てた家や、あちこちの思ひ出を、主に私の生立ちに結びつけて、ほつくもの靜に話してゐた。そのなかに、私がうる憶えてゐることで、母もそれは承知の上で、當時住んでゐた家の構造や庭の

つくりから、ついまた引き出されて来た話がある。

——五か六の時分、病身で、そしておそろしく神経質だった私に、一つの幻想がこびりついて、——さう、半年くらゐぬけなかつたやうな氣もするけれど、その實は、存外一週間かそこらだったのかも知れないが、その間、私はまるで氣違ひ同然だったと云ふ。夏のこと、縁側で、岐阜提灯の下で、両親と一緒に夕涼みをしてゐると、急にまたいつもの幻影を見たのだ。自分の本當の母が、ついこの楓の木の下に立つてゐる。

——勿論私は、自分の戸籍謄本を見たこともあるし、その他のあらゆる事實から推して、些の疑ふ豫地もなく、この時おかみのものだからと云つて卓掛を膝上た母よりほかに、本當の母などが有り得ようとも思はないのだが、その半年が一週間かの、病的な期間には、どうしてもその母を母とは信じられなかつたのだ。

それには、然し原因がある。あとにもさきにもいつた一度しか行つたことのないひとりで、あとにもさきにも一度しか會つたことのない一人の女、——それは、今思ひ出しても、これ以上はないと思はれるほど美しい一人の女が、私を膝の上に抱き載せて、耳へ口をよせて、「あなたの本當の阿母さんは、あたしです。おうちにいらつしやる阿母さんは、あれはあなたを生むためにおなかを痛めた方ではありません」と囁き、自分も一ぺんで、「あゝ、それに違ひない、これこそあたしの本當の阿母さんだ」と、思った。——それからのことなのだ。然しそれが實際あつたことか、夢か、それさへはつきりしないくらゐだから、まして、その家へ、誰につれて行かれたとも、住居がどんな風で、女がどんな装をしてゐたとも、私には更に記憶がないのだ。その後幻想的に、いろいろ補ひやら創作やらが附け加はりはしたけれど、記憶としては何もないと云ふのが本當だらう。私は夜も書もななく、その「本當の母」を戀ひ慕つてゐるうちに、時折幻影までも見るやうになつて了つたのだ。

「阿母さん」

と、叫ぶなり、私は跣足で庭へ飛びおり、家の庇より五六尺も高いほどの楓のそばへ駆けよつた。年中忙しく、ほとんどうちにもたことのない父が、母から話だけは聞いてあても、まだその時まで、眼前の私の狂態を見たことはなかつたのだ。

「あなた！ また初まりました、これですよ！」

すぐ母が追いかけて来て、私を抱きとめたが、然し、「本當の母」の姿は、まだそこに立つてゐるので、私は身を悶掻き泣き喚き、母の手からずり落ちようとあせつてゐるうちに、父が、床の間に飾つてあつた刀を持つて庭に出て来た。そして、今お前を抱いてゐるのが、お前の本當の阿母さんだ、それよりほかに本當の阿母さんなんぞある筈はない、もしあるなら俺が斬り殺してやるから、どこにゐるか云へ！ さアこゝらか、こつちか、この邊か、と云ひながら、枝垂れた楓の枝を、ぱさりと斬り落して、めつたやたらに刀を振り廻し、夏の夕闇に、ギラリくと冷たい刃の光を閃かした。

で、「本當の母」の姿が消え、以来二度とそのよしない幻想に苦しめられるやうなことはなくなつたが、然し、いまだに時々思ひ出すほどの深い印象は残つてゐる。

——母は、その夕涼みをしてゐた縁側や、枝先を斬り落された楓のことなどについて話した。さうしながら、土耳其模様の卓掛の糸の老を、あちこち繕つて廻つた。

一時間ほどの後に、私は、その無言の食事について、さして心を亂さずに、自分の勉強部屋で、何か明日の學課の仕度をしてゐたけれども、然し、あとで思入ば、それが親子三人揃つて認めた最後の晚餐となつたのだ。

その晩のうちに、母がゐなくなつて了つた。

同時に、私の復習のために雇はれてゐた大學生が姿をかくした。後に知つたことだが、これは母の三度目の過だつた。それを最後に、たうとう母も歸らず仕舞だつた。

一年半ほどしてから内閣が變り、父も役が罷免された時、引越しの手傳に來てゐた男が、嘗て還曆の祝いに、父の創めた學校の教職員、卒業生、在學生から贈られた胸像の荷拵へをしてゐるところへ、丁度私が通りかゝつた。と、見ると、青銅で作られた父を、グルグル巻きにくるんでゐるその布が、土耳其模様の、古ぼけた卓掛だつた。はつと思つて立ちどまつた。

「おい、それア君いけないだよ。その卓掛は、こゝに附いたものなんだ。つまり、おかみのものなんだ」

ふと、私は、「おかみ」と云ふ言葉を使つてゐた…。

「なアに、若様、こんな襪褌の一枚や二枚、構ふもんですかね」

さう云つて、手傳の男は、少しも仕事の手を休めようとはしなかつた。

私は立つて眺めてゐた。偶然、裏返つたところに、膝り糸の目立つ繕い箇所があつた。

私は立つて眺めてゐた。——無言の晚餐が、繪になつて、私の眼の前に浮んで來た。